

山形県の小さな町で映画「嗚呼 満蒙開拓団」を上映して

大場 武男

1. 戦争体験と平和を語るつどい——今年は映画上映

8月、私たちは、映画「嗚呼 満蒙開拓団」(羽田澄子監督作品)を最上町で自主上映した。県境の宮城県大崎市や栗原市、県内からは遠く米沢市、山形市、最上地方の市町村からも足を運んでいただき、300人の方々に観ていただいた。中には満州の地図を持参し、入植した地と苦難の歴史を語ってくれた人もいた。

NPO法人やまなみを設立した直後の昨年夏、「戦争体験と平和を語るつどい」を開催し、町内の戦争体験を語り継ぐテーマで、3人の方に戦争体験を語っていただいた。

15歳で満蒙開拓青少年義勇軍に加わって満州に渡り、終戦後13年間も大陸に取り残された体験と終戦直前、ソ連軍の侵攻によって8歳で母親と決死の逃避行を経て引き揚げて来た生々しい体験談が強く印象に残った。

これをきっかけに、歴史の事実を正確に知りたいと思い、いろいろな満蒙開拓関係の本を購入して読んでいたところに、6月、東京の岩波ホールを皮切りに映画の上映が始まった。「嗚呼 満蒙開拓団」を最上町で自主上映しようと、6月末、町内に上映実行委員会が立ち上がった。

2. 羽田澄子監督のドキュメンタリー映画との出会い

実は私は羽田澄子監督作品の大ファンだった。今まで多くの作品を観てきた。

1970年代から80年代前半頃に、「薄墨の桜」「早地峰の賦」など民俗文化的な作品に感銘していた。80年代半ば頃から歌舞伎などの文芸作品を発表するかたわら、福祉の分野で、日本の遅れた高齢者福祉政策転換の起爆剤になるような作品を次々に世に送り出して来た。「痴呆性老人の世界」「安心して老いるために」「住民が選択した町の福祉」「続、問題はこれからです」2006年、終末期医療の現実を描いた「終わりよければすべてよし」で医療の世界に、人間の死生観について問題提起した。

私は2007年まで横浜市に住んでいたが、2002年頃、「続、住民が選択した町の福祉—問題はこれからです」を実行委員会をつくり自主上映し、500人程の入場者で会場をいっぱいにしたことがあった。この上映運動がその後、認知症高齢者グループホームの開設につながった。「終わりよければすべてよし」は岩手県一関市まで出かけて行って観た。

今、私は60歳を機に、ふるさとにUターンして、地域でNPO法人を立ち上げて、認知症高齢者グループホームづくりを行っているが、認知症介護等の福祉理念確立に羽田作品から学ぶことが多い。羽田さんには、今後も元気に、またすばらしい作品を世に送り出してほしいと願っている。

3. 満州引揚者と戦後入植した開拓農民の想いと涙

私たちは、自主上映を成功させるために、いろいろな活動に取り組んだ。

1956年に作成されたガリ版刷りの満州引揚者の名簿が見つかった。調べてみたところ、町内に10人程度の生存者がいることがわかった。満州引揚者、シベリヤ抑留体験者

の座談会、体験を語る会を開いた。引揚者が保有していた貴重なビデオをみる機会があり、満蒙開拓の実相を知るのに非常に役立った。

また、太平洋戦争で海軍の偵察飛行艇のパイロットだった町内在住者の「戦争体験を語る会と音楽のつどい」も開き、多くの人が聞きに来てくれた。引揚者が前売券を積極的に普及して、上映の成功に大きな役割を果たしてくれた。また依頼した前売券を完売する人が続出した。

山形県は長野県について満州移民が多い。その中でも最上地方の多数の家族が海を渡った。金山町には、開拓移民を訓練した丸い日輪宿舎が今でも現存している。

実行委員会では、最上地方1市4町3村の自治体を訪問し、ポスターや前売券を取り扱ってもらった。多くの自治体で、チラシを全居配布していただいた。県内のテレビ局5社、各新聞社、支局にも足を運んだ。また、県内の日中友好協会との交流のきっかけもできた。

最上町の前森開拓地に戦後入植した人の中に、満州引揚者が多い。私たちは、この開拓地をくまなく訪問し、多くの開拓関係者に映画を観ていただいた。

映画のシーンと、戦後の一家の苦難の歴史をだぶらせて、涙する人もあった。映画上映の主催者としても涙を禁じえなかった。

4. 満州移民とは何だったのか。

私たちは映画入場者に「満州開拓史」年表と開拓団の入植地を表わす地図を資料として配布した。地図を見た人から、開拓団がなぜソ満国境に多く集中しているのかという質問があった。

満州移民の本質は、昭和の初期あいつぐ冷害と不況で（山形県最上地方は昭和の初期、やませによる冷害で、少女の身売りが激増した地域とされている）疲弊した農村の過剰人口対策、傀儡国家「満州国」の防衛、対ソ防衛などの国家的軍事的役割を担わされて、軍部が沃野の土地を奪い入植させた国策としての侵略移民だった。

敗戦直前にソ連軍が侵攻した時、すでに根こそぎ現地応召され、男性の少ない開拓団の逃避行がどんな苛酷だったかを、引揚者の座談会、体験を語る会でつぶさに聞いた。

当時の政府が、敗戦直前まで開拓団を送り込み、日本から届いた荷物をほどくひまもなく、逃避行の中、次々と肉親を失っていった悲壮な体験、軍や満州国の要人、家族が特別列車を仕立てて逃げ出し、列車にしがみついた開拓民を銃剣で振り払って出発した事実も語ってくれた。映画でもその事実が証言された。

満州移民とはいったい何だったんだろうか。戦前、窮乏が続く農民に移民熱をあおって進められ、終戦まで27万人も海を渡った日本人が、終戦直後の混乱で、死亡、行方不明者8万数千人にのぼったこの「満蒙開拓」は、国家による「大量棄民」という戦争犯罪ではなかったのか。そして、この犯罪は一方で中国残留孤児問題を引き起こした。

半世紀以前、満州移民を大量に送り出した山形県の小さな町に住む今、このような戦争体験を風化させることなく、戦後憲法により日本国民が営々として築いて来た平和な社会と、日中友好を大切に守って行かなければならないと思っている。

（おおば・たけお：1947年生まれ。62歳。60歳でふるさと山形県最上町にUターン。現在、NPO法人やまなみ理事長。認知症高齢者グループホームづくりや、まちづくり、文化芸術の振興、地域経済の活性化等の活動を行っている）